東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

三浦環の《冬の旅》（1）：訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 早坂, 牧子, Hayasaka, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1475

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

三浦環の《冬の旅》(1)：
訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

早　坂　牧　子

東京音楽大学研究紀要　第46集　－2022－

三浦環の《冬の旅》(1)：訳詞と1946年録音に見る演奏の覚書

早坂牧子

はじめに：三浦環と《冬の旅》

本稿の目的は、三浦環（1884−1946）が晩年に度々演奏したシューベルトの《冬の旅》について、新たに発見された三浦自身の邦訳による歌詞と録音をもとに、その演奏の実際を報告し、第二次世界大戦前後の日本における西洋芸術歌曲の演奏実践の一端を明らかにすることにある。

三浦環といえば歌劇《蝶々夫人》の印象が余りに強いが、その音楽人生を通じて実に多様なジャンルの歌に取り組んでいる。残された録音や演奏会プログラムからは、オペラのアリアや芸術歌曲のみならず、世界各地の民謡、日本歌曲、俗謡、幼少期習っていた長唄など、その幅広いレパートリーが窺える。病床でドビュッシーの歌曲〈バルコン〉（露台）を勉強し始め、死の直前にも口ずさんでいたというから、生涯の最後まで新たなレパートリーを開拓しようという意欲を持っていたようだ。

その三浦が晩年に力を入れていたのが、シューベルトやシューマンの連作歌曲集全曲演奏である。1935年に三度目の長期海外生活を終え、日本に本拠地を移して数年は、三浦は精力的にオペラ公演を主催していたものの[1]、次第にオペラ公演から独奏会へ演奏活動の主軸を移していく。様々な要因があるだろうが、1939年5月に校長を務める三浦環歌劇音楽院が学校閉鎖に追い込まれたこと[2]、同年7月三幕オペラ《熊野（ゆや）》の公演でも大きな負債を抱えたこと、当時藤原歌劇団をはじめとする若手の歌劇団が育ちつつあったことも、三浦がオペラ制作から遠ざかるきっかけになったかもしれない。音楽プロデューサーの高橋巌夫によれば、《熊野》の後に開催した歌曲リサイタルが非常に好評であったので、「今後はシューベルト、シューマンの代

1 帰国後の三浦は、日本における本格的なオペラ公演を普及させるべく、自らの訳による《蝶々夫人》で全国を行脚するほか、1937年には門下生による「三浦環声楽研究所」で国産オペレッタ《お前と私》を上演、1938年には「三浦環歌劇音楽学院」を開校、《セビリアの理髪師》、《カルメン》、《ファウスト》、《椿姫》など、数々のオペラ公演を実現させている。

2 「三浦環歌劇音楽学院」は、日本高等教育会会長等を務めた高松栄次郎が、かじ子夫人を校主に、三浦を校長として設立した音楽学校。1939年5月13日付、読売新聞の記事（「話の巷」、朝刊7頁）によれば、文科省の承諾なく「学院」として設立し名士を講師に任命したことが問題視され、自粛要請を受けたため、高松が三浦の慰問演奏旅行中に閉校を決めてしまったという。同日付東京朝日新聞の記事（「青鉛筆」、朝刊11頁）には、5月12日に三浦が行った校長辞任会見で、演奏旅行中に高松が校舎を勝手に移転させてしまったこと、三浦の写真入り講義録を承諾なく出版・販売していたことに不服である旨が書かれている。同年、奮起した三浦は自ら「三浦環声楽学園」を設立、歌唱法、音楽史、楽曲分析から舞踊まで、充実した舞台人養成プログラムを用意し後進指導を続けるが、学園の記録が確認できるのは1940年までで、その後は戦争のため活動停止状態になったと思われる。

表的なものを選んで、ぜひ歌いたい」と、独唱会の開催に意欲をみせていたという[3]。その言葉通り、1943年頃から《詩人の恋》、《女の愛と生涯》、《美しき水車小屋の娘》、《冬の旅》と、次々に連作歌曲集の全曲演奏会を実現している[4]。何れも自身の訳詞で歌われており、邦訳での全曲演奏は本邦初であった。

本稿で取り上げる三浦訳の《冬の旅》は、記録によれば、1943年10月12日に日比谷公会堂において原智恵子の伴奏により初めて全曲を演奏、1944年3月8日に名古屋市公会堂で、3月11・12日に大阪朝日会館で、3月13日に京都朝日会館で、同じく原の伴奏で演奏した。戦火が激しくなり疎開した山梨県山中湖村では、共に疎開していた弟子の菅美沙緒(1916−2000)に《冬の旅》の稽古をつけている[5]。同村には原智恵子も疎開してきていたから、彼女のピアノ伴奏で練習をしたこともあっただろう。終戦直後の1945年12月1・7日、三浦は日比谷公会堂において再び《冬の旅》全曲を演奏している。二日間四回公演で、クラシック音楽の独唱会としては戦後初の催しであった。この時の三浦の演奏を、音楽評論家の吉本明光は次のように記している。

> ステージに金屏風を飾り、その前で振り袖でうたった三浦さんの「冬の旅」は前人未踏のものであった。およそ概念的に考えるシューベルトではない、それは三浦環ならではうたえない、風格のにじみ出たドラマティックな「冬の旅」であった[6]。

翌1946年3月20・21日、日比谷公会堂での《美しき水車小屋の娘》全曲演奏会に臨んだ三浦は、既に病に冒されていた。これが最後になるかもしれない、と涙ながら挨拶する三浦に、満場の観客が声援を送り、それに応えるように二日間二回公演を歌いきった。この時の歌唱は、往年のプリマ・ドンナが人生最後に挑んだ絶唱として、聴く者に強い印象を残したと伝わる[7]。

この《水車小屋》演奏から二週間あまり、死去の約一ヶ月半前にあたる1946年4月5日に、三浦はNHKの依頼により、クラウス・プリングスハイム(1883–1972)の伴奏で大東学園講堂にて《冬の旅》全曲を録音した。吉本によれば、三浦は足の指まで赤いマニキュアをし、紫のドレスを着て演奏に臨んだという[8]。マネージャーに背負われて講堂に入ると、演奏前にいつもそうしているように、生卵を一つ飲み、安楽椅子に腰掛けながら一時間半の録音をこなした。1946年6月号の『音楽之友』には、この録音時の三浦の写真が掲載されている(図1)。ふくよ

---

3 高橋巌夫、『昭和激動の音楽物語』(葦書房、2002年)、73–74頁。「三浦環獨唱三大オペラ」(1939年6月9日、日比谷公会堂、筆者所蔵)プログラム挨拶には、「私は昨年十一月十六日に私の第一回獨唱會を公演致しました。其折はリード(リート)ものを歌ひまして皆さまに大好評をいたゞきました。(…)これを機會に私は春はオペラもの秋はリードものゝ獨唱會を定期開催致したいと思ひます。」とある。

4 田辺久之作成の年表によれば、三浦によるリート全曲演奏の最初の記録は、1943(昭和18)年10月12日日比谷公会堂での《女の愛と生涯》であるが、高橋(前掲書、74頁)にはこれ以前にも1941(昭和16)年シューマン《詩人の恋》の演奏会をプロデュースした旨の記述がある。

5 吉本明光編、『三浦環:お蝶夫人』(日本図書センター、1997年)、232頁。

6 前掲書、237頁。

7 演奏会の様子を、高橋と吉本が詳しく伝えている。以下参照:高橋、『昭和激動の音楽物語』、160–165頁、吉本編、『三浦環:お蝶夫人』、239–242頁。

8 吉本編、『三浦環:お蝶夫人』、242–243頁。

図１．《冬の旅》を録音する三浦環[9]

かだった1930年代の面影はなく、痩せて小さく椅子に納まりながら、マイクに向かい両手を軽くあげて歌う三浦の姿が映る。背後では、弟子の一人であった原信子（1893−1979）が三浦の演奏を見守っている。《冬の旅》の録音を終えた後、4月9日にはNHK第一スタジオで《蝶々夫人》を、13日には「庭の千草」「ホーム・スウィート・ホーム」などの小品を録音し、程なくして病状の悪化した三浦は、５月26日に63歳で生涯を終えた。《蝶々夫人》と小品は後にラジオ放送されているが、《冬の旅》は放送日の記録が確認できない。これが放送を前提として録音されたものか、記録用に録音されたものか、そもそもなぜ《冬の旅》を録音することになったかは、不明である。いずれにしても、三浦はこの時恐らく人生最後の録音となることを予期していただろうから、声楽家人生の総決算と思って《冬の旅》に臨んだことだろう。

《冬の旅》の歌詞・録音調査と分析

日本の聴衆により伝わる西洋音楽のあり方を模索していた三浦は、オペラや歌曲の演奏に際し自ら邦訳して歌うことが多く、《冬の旅》も自身の訳詞で歌ったことが知られていたが、関連資料が散逸し、訳詞と演奏についてこれまで詳しいことは分かっていなかった。ところが、三浦が病床で録音した《冬の旅》の音源が現存することが判明したのである。きっかけとなったのは、2021年に三浦の評伝[10]を執筆中であった大石みちこ氏（東京藝術大学大学院映像研究科客員教授）との会話の中で、《冬の旅》の歌詞が何とか分からないだろうか、という話題がのぼったことであった。万一NHKに音源が残されている可能性があるかもしれない、と録音の保存状況を照会したところ、音源が確かに残っていることが確認できた。音源は「三浦環　独唱曲集　シューベルト　冬の旅」のタイトルがつき、全24曲が３回に分けて収録されている（I: 1～9、II:10～20、III:21～24）。

音源は一般公開されていないため、NHK番組アーカイブス学術利用トライアルの制度を利用し、2021年11月～2022年３月の間の約30日間にわたり、放送博物館にて調査対象の音源を聴取、歌詞の書き取りと、演奏スタイルの分析を行った。音源の保存状態は良好で、幸いにもほとんどの歌詞を聴取で書き取ることができた。数カ所、音が飛んでいたり発音が不明瞭であったり

9 『音楽之友』（1946年、6月号）、巻頭写真（番号3）。「病床に於て最初の放送録音に歌ふ環さん。立てるは原信子女史」のキャプションがある。
10 大石みちこ、『奇跡のプリマ・ドンナ オペラ歌手・三浦環の「声」を求めて』（KADOKAWA、2022年）。

して聞き取れない部分があったが、その後「玉川大学教育博物館ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」所蔵の演奏会プログラム[11]に全曲の訳詞が掲載されていることが分かったため、NHKアーカイブスでの調査と合わせ、全24曲の正確な訳詞が今回初めて明らかとなった。

音源聴取に際しては、演奏スタイルに関して、①テンポ②ポルタメントとフェルマータ③ブレス④音程⑤歌詞の語句と音符の関係について、それぞれ以下のように分析・考察を行った。①テンポ分析では、ストップウォッチ計測により演奏テンポを測定し、三浦の採用しているテンポ、曲中でのテンポの揺れを観察した。②ポルタメントとフェルマータについては、音源から聞き取れるポルタメントの箇所を記録し、時間を大幅にかけているものはストップウォッチ計測を行った。また、③ブレスの位置を観察し、譜例に書き込みながらフレージングの特徴を観察した。④音程については、譜例と比較しながら聴取した全体的な印象を記録し、⑤歌詞の語句と音符の関係については、譜面に訳詞を書き込んだ上で音と言葉のシラブルの対応関係を検討した。

三浦の《冬の旅》の録音が良好な状態で保存されていることが確認できたことは、三浦環研究の上では大きな発見である。音飛びや雑音の入った箇所が多少あるものの、三浦の歌唱は直接聴取による分析や鑑賞に耐えうるものである。またプリングスハイムのピアノ伴奏は、時に不安定になる三浦の歌唱によく反応しており、彼が優れた伴奏の能力を持っていたことが確認できる。戦後直後の演奏会における演奏レベルを知る上でも、興味深い歴史的音源といえるだろう。

本稿では、三浦の歌唱の実際を記録する目的で、《冬の旅》第一～七曲の原詩・訳詞を掲載、調査時に観察された特徴を覚書した上で、録音に基づき作成した訳詞付きヴォーカル・スコアを添付する。なお、歌詞の漢字書き・仮名書きは演奏会プログラムを参照し、新字体・新仮名遣いに改めた。今後数回に渡り全曲の譜面を掲載した後、全体の演奏の特徴と、三浦の演奏の歴史的位置づけについて論じる予定である。

《冬の旅》原詩と三浦環訳

三浦の訳詞の特徴が分かりやすいように、以下に原詩と三浦の訳詞を並記する。楽譜上の同一フレーズにおける歌詞の対比を基本としたが、見やすさを優先して一部対応関係を調整したところがある。

11「玉川大学教育博物館ガスパール・カサド 原智恵子コレクション」所蔵、「軍人援護資金醵集のため 三浦環獨唱會 協奏 原智恵子」（受入番号70-0-78）。

1．‘Gute Nacht’「さらばよ君よ」

Fremd bin ich eingezogen,	ただひとり行く
Fremd zieh' ich wieder aus.	冬の旅路
Der Mai war mir gewogen	五月の花も
Mit manchem Blumenstrauß.	乙女の笑みも
Das Mädchen sprach von Liebe,	優しき母も後に残し
Die Mutter gar von Eh'.	恋を語りし家も後に
Nun ist die Welt so trübe,	風すさむ野辺の雪を踏みつ
Der Weg gehüllt in Schnee.	おじかのあしあとたどり進む
Ich kann zu meiner Reisen	旅立つ時を
Nicht wählen mit der Zeit,	えらみはやらで
Muß selbst den Weg mir weisen	おぐらき小道を
In dieser Dunkelheit.	只一人
Es zieht ein Mondenschatten	つめたき月こそ
Als mein Gefährte mit,	わが友なれわが友なれ
Und auf den weißen Matten	真白き雪の
Such' ich des Wildes Tritt.	野辺を行きつ
Was soll ich länger weilen,	いかでかにぶき
Daß man mich trieb hinaus?	わがあゆみよ
Laß irre Hunde heulen	犬の声きこゆ
Vor ihres Herren Haus;	なが門辺に
Die Liebe liebt das Wandern -	恋するわれの胸にひびく
Gott hat sie so gemacht -	神のたまいし恋のなやみ
Von einem zu dem andern.	さらばよ君よ
Fein Liebchen, gute Nacht!	ねむりませやねむりませや
Will dich im Traum nicht stören,	夢路の君の
Wär schad' um deine Ruh'.	さめぬひまに
Sollst meinen Tritt nicht hören -	さらばとしるす
Sacht, sacht die Türe zu!	君が門辺に
Schreib im Vorübergehen	永久に行くさらば君よ
Ans Tor dir: gute Nacht,	さらば君よさらばさらば
Damit du mögest sehen,	永久に行くさらばよ君
An dich hab' ich gedacht.	さらばよ君、さらばよ君

三浦の訳は、上に見るように必ずしも原詩に忠実ではない。例えば、第一連最終行「おじかのあしあとたどり進む」は原詩では第二連の最終行である。シューベルトは‘Nun is die Welt so trübe, / Der Weg gehüllt in Schnee.’のフレーズを二回繰り返しており、本来「風すさむ野辺の雪を踏みつ / 風すさむ野辺の雪を踏みつ」とするのが原詩に忠実であろうが、三浦は第二連最終行の「おじかのあしあとたどり進む」をここに組み合わせ、同じ詩行の繰り返しを避けている。NHKの録音では、収録時間の制約のためか二・三連がカットされているが、他の演奏会でもカットして歌うことがあり、その際でも牡鹿のイメージは入れたいと思っての措置か

もしれない。第四連では、原詩の内容は細かく訳出せず、ひたすら「さらば」と別れの言葉を繰り返している。

歌唱部分のテンポは88〜100BPM。原語で‘Gute Nacht’とタイトルを紹介してから歌唱に入っている。第二・三連をカットし、第四連、二短調からニ長調に転調する「夢路の君の」と歌いだすところ(39小節)では、「ゆ」(F#5)を3秒ほど伸ばしているのが興味深い。また、最後の「さらばよ君」(55〜58小節)のリタルダンドはかなり強烈で、「君」の「き」(C#5)でやはりフェルマータをおき、24BPMまでテンポを緩ませる、オペラのアリアを歌っているかのような、劇的なテンポ表現になっている。演奏時間は3分27秒。

2.‘Die Wetterfahne’「風信旗」

Der Wind spielt mit der Wetterfahne	風になびく風見の旗
Auf meines schönen Liebchens Haus.	君が家にたかく
Da dacht' ich schon in meinem Wahne,	我が心のなやみを
Sie pfiff' den armen Flüchtling aus.	あざ笑うが如く
Er hätt' es eher bemerken sollen,	とくうつる君が心
Des Hauses aufgestecktes Schild,	風になびく旗の如きを
So hätt' er nimmer suchen wollen	われはしらず
Im Haus ein treues Frauenbild.	ただあこがれしよ
Der Wind spielt drinnen mit den Herzen	吹きすさむ心の風よ
Wie auf dem Dach, nur nicht so laut.	音なく
Was fragen sie nach meinen Schmerzen?	問いたもうなよ君よ
Ihr Kind ist eine reiche Braut.	富む人にとつぐ君をなげく

三浦は前曲最後のピアノの響きが完全に消えないうちに、タイトルをドイツ語で言い、アタッカでピアノ前奏が始まる。訳詞は第一曲よりは原詩の内容をふまえており、少ないシラブルで原詩の精神を端的に伝える工夫がみられる。歌の最後「なげく」と歌う部分、45小節6拍目(G#)と46小節1拍目(A)は、原曲よりオクターヴ上(G#5・A5)で歌われる。A5にはフェルマータが置かれ、ピアノ伴奏は完全に停止して歌のみになる(歌詞はもはや「なげく」とは聴き取れず、「ああ」と歌っているようにも聞こえる)。三浦がA5を歌いきってから、ピアノが46小節の頭から仕切り直して後奏を演奏する。テンポは132〜237BPMと大きく幅があり、曲想に沿って緩急の対比が付けられている。演奏時間約2分(途中音飛びあり)。

3．‘Gefrorne Tränen’「凍りたる我が涙」

Gefrorne Tropfen fallen	つめたき涙
Von meinen Wangen ab:	ほほをつたいて
Ob es mir denn entgangen,	われ知らねども
Daß ich geweinet hab'?	われはなきぬ
Ei Tränen, meine Tränen,	我が涙我が涙
Und seid ihr gar so lau,	などて朝露の如く
Daß ihr erstarrt zu Eise	つめたく
Wie kühler Morgentau?	かくも凍れるや
Und dringt doch aus der Quelle	あつき胸の
Der Brust so glühend heiß,	泉のたぎりて
Als wolltet ihr zerschmelzen	なやめる冬の
Des ganzen Winters Eis!	氷をとかすものを

訳詞は、少ないシラブルで端的に原詩の内容を捉えている。下降音型には時にポルタメントが付される（「なみだ」「つゆの」）。NHKの録音では、29～39小節のフレーズ（「あつき胸の～とかすものを」）が二度繰り返されているが、歌っているうちに分からなくなってしまったものだろうか。歌唱部テンポ72～92BPM、演奏時間３分15秒。

4．‘Erstarrung’「氷結」

Ich such' im Schnee vergebens	雪降る野辺を
Nach ihrer Tritte Spur,	たどりゆきつも
Wo sie an meinem Arme	君と共にゆきし
Durchstrich die grüne Flur.	あと見えず
Ich will den Boden küssen,	大地に口づけ
Durchdringen Eis und Schnee	熱き我が涙のしずくに
Mit meinen heißen Tränen,	雪をとかさん
Bis ich die Erde seh' .	とかさん
Wo find' ich eine Blüte,	いずこや花は
Wo find' ich grünes Gras?	緑の草も
Die Blumen sind erstorben,	花はくちて
Der Rasen sieht so blaß.	草もかれぬ
Soll denn kein Angedenken	思い出をここに
Ich nehmen mit von hier?	のこし行くわれ
Wenn meine Schmerzen schweigen,	語らん人も
Wer sagt mir dann von ihr?	いずれにあらん
Mein Herz ist wie erstorben,	我が胸凍りて
Kalt starrt ihr Bild darin;	君をとざす
Schmilzt je das Herz mir wieder,	我が心の氷とくる時
Fließt auch ihr Bild dahin!	君もきえなん

シラブルの少ない文語調が功を奏して、ほぼ原詩に忠実な訳出となっている。嵐のような心情を表現し、三浦のテンポも大きく揺れる。第一・三連は160BPM前後、第二連は少しテンポが揺み116～130程度。第二連に入る47小節目で、三浦は入りのタイミングが一拍遅れるが、ピアノはこれにうまく対応している。演奏時間３分12秒。

５．‘Der Lindenbaum’「菩提樹」

Am Brunnen vor dem Tore	泉のほとりに
Da steht ein Lindenbaum;	立てる菩提樹
Ich träumt' in seinem Schatten	木かげに行きて
So manchen süßen Traum.	夢をむすびつ
Ich schnitt in seine Rinde	みきにきざみぬ
So manches liebe Wort;	深き恋を
Es zog in Freud' und Leide	笑みとうれいに
Zu ihm mich immer fort.	いこいしそのかげ
Ich mußt' auch heute wandern	今日もさまよう
Vorbei in tiefer Nacht,	さよなかに
Da hab' ich noch im Dunkeln	暗きに立ちて
Die Augen zugemacht.	眼閉ずれば
Und seine Zweige rauschten,	枝のささやき
Als riefen sie mir zu:	耳につぐる
Komm her zu mir, Geselle,	来ませやここに
Hier find' st du deine Ruh'!	安けき此のかげ
Die kalten Winde bliesen	つめたき嵐
Mir grad' ins Angesicht;	面をうちて
Der Hut flog mir vom Kopfe,	かさとばせども
Ich wendete mich nicht.	そのままたたずむ
Nun bin ich manche Stunde	今木影遠き
Entfernt von jenem Ort,	吾れに聞こゆ
Und immer hör' ich's rauschen:	枝のささやき
Du fändest Ruhe dort!	此処にいこえと

三浦はここで、原語‘Der Lindenbaum’に続き日本語でも「菩提樹」とタイトルを言ってから演奏に入っている。歌唱最後の75～76小節目では、やはり最後の二音（F#4・E4）を高い音域に上げ（D#5・E5）、軽くリタルダンドをかけつつ、終結を強調したスタイルで歌っている。歌唱部基本テンポは53～60BPM、第二連は少しテンポが前向きになり68BPM程度、第五連「つめたき嵐」からは更に進んで74BPM。演奏時間約４分30秒。

6. ‘Wasserflut’「満つる水」

Manche Trän' aus meinen Augen	我が涙雪の上に
Ist gefallen in den Schnee;	あふれこぼれぬ
Seine kalten Flocken saugen	つめたき雪にとけぬ
Durstig ein das heiße Weh.	我があつき涙は
Wenn die Gräser sprossen wollen	めざめし千草もえいで
Weht daher ein lauer Wind,	やさしき風ふき
Und das Eis zerspringt in Schollen	氷もとけ行きて
Und der weiche Schnee zerrinnt.	雪はとけて流るる
Schnee, du weißt von meinem Sehnen,	我がなやみを知る雪よ
Sag', wohin doch geht dein Lauf?	汝が行く手はいずこぞ
Folge nach nur meinen Tränen,	我が涙にとけし雪よ
Nimmt dich bald das Bächlein auf.	とく流れや小川に
Wirst mit ihm die Stadt durchziehen,	町を横切りて
Muntre Straßen ein und aus;	ながるる其水
Fühlst du meine Tränen glühen,	我が涙の其水
Da ist meiner Liebsten Haus.	いとし君が門辺をみよぎりて流るる

三浦は跳躍する下降音型で所々ポルタメントを付している。三連符の下降音型「なみだ」「ながる（る）」「かどべ」のフレーズは一音ずつテヌート気味に「な・み・だ」と歌っている。第一～三連は50BPM、第四連は終結に向かって次第にリタルダンドし、23BPM程度までテンポが落ちる。演奏時間３分45秒。

７．‘Auf dem Flusse’「川の上にて」

Der du so lustig rauschtest,	たのしげにながるる
Du heller, wilder Fluß,	小川のながれ
Wie still bist du geworden,	ふと、氷とざし
Gibst keinen Scheidegruß.	今は音なし
Mit harter, starrer Rinde	川は氷に
Hast du dich überdeckt,	とざされて
Liegst kalt und unbeweglich	つめたき川は
Im Sande ausgestreckt.	砂地よりつづく
In deine Decke grab' ich	氷を石もて
Mit einem spitzen Stein	打ちくだきて
Den Namen meiner Liebsten	なつかしき御名と
Und Stund' und Tag hinein:	君知りし日と
Den Tag des ersten Grußes,	又別れし日を
Den Tag, an dem ich ging;	しるしきざみ
Um Nam' und Zahlen windet	指輪をもそえて
Sich ein zerbrochner Ring.	しるしうずめん

Mein Herz, in diesem Bache	我が心、此川こそ
Erkennst du nun dein Bild?	われとおなじ
Ob's unter seiner Rinde	あふるる水よ氷の底に
Wohl auch so reißend schwillt?	つのる我が思い

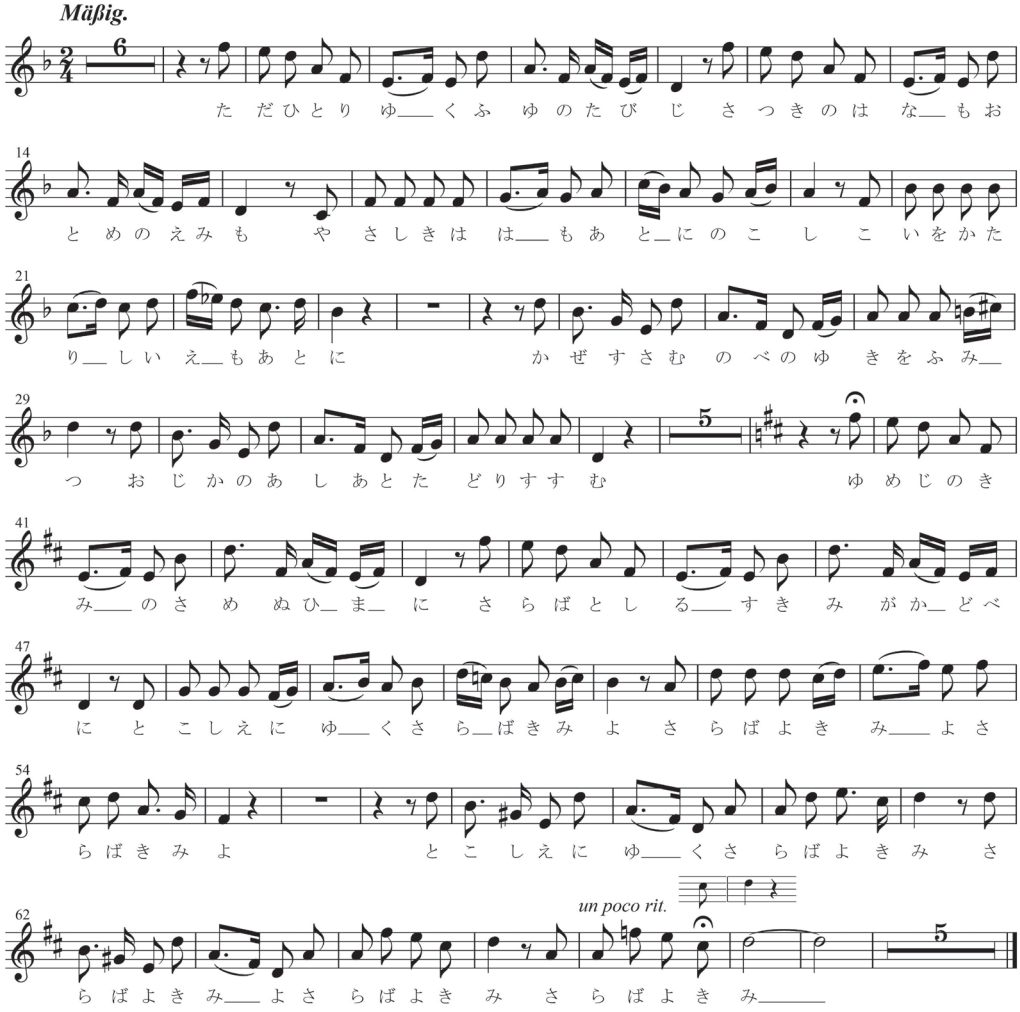
全体的に原詩の精神に即した訳詞となっているが、本曲で三浦は、一音にいくつかのシラブルを当てる際に付点のリズムを多用し、原曲のリズムを多少犠牲にしている（例：11小節）。第一連のテンポはおよそ74BPM、第二連は少し緩み65BPM。第四連では、80BPM(41小節～)、90BPM（52小節～）、60BPM（59小節～）、その後急加速して106BPM（62小節～）、終結に向かい60BPMまで落ちる（69小節）。曲の後半、テンポの緩急と共に少しずつ緊張を増し築かれるクライマックスは、力強い高音とあいまって、三浦の劇的な表現力が発揮された演奏となっている。演奏時間約３分50秒（一部音切れあり）。

本稿で扱った第一曲から第七曲までのヴォーカル・スコアを添付した。本文と併せて参照のこと。三浦の歌唱を可能な限り忠実に記譜したもので、リズム、スラーに原曲と異なる箇所がある（本稿ではブレス表記は割愛した）。丸括弧で示した速度変化は、三浦の演奏に基き加えたものである。また、三浦の歌唱が著しく原曲と異なる箇所は、原曲の対応小節をオッシアで表記した。次号では第八曲以降の覚書と譜面を紹介したい。

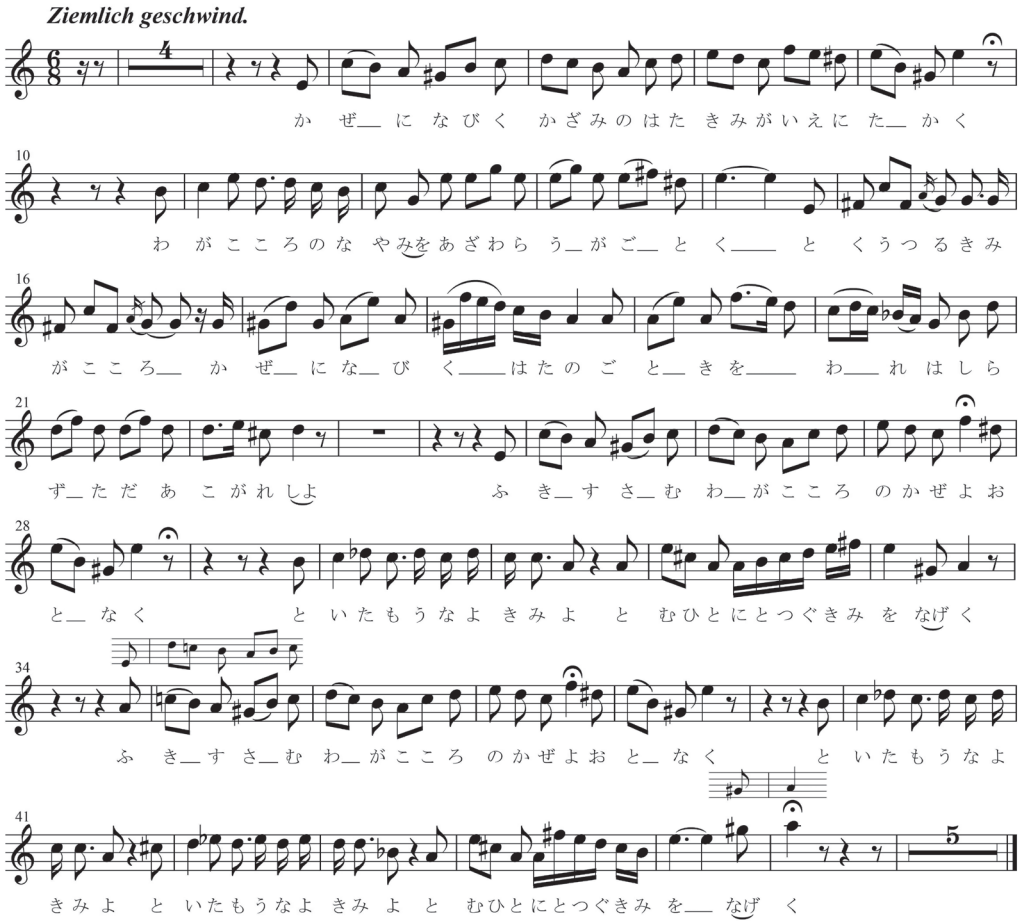
＊本研究は、NHK番組アーカイブス学術利用トライアル（2021年後期）による成果で、JSPS科研費 JP20K12896の助成を受けたものです。

（本学准教授＝外国語（英語／ミュージックリベラルアーツ）担当）

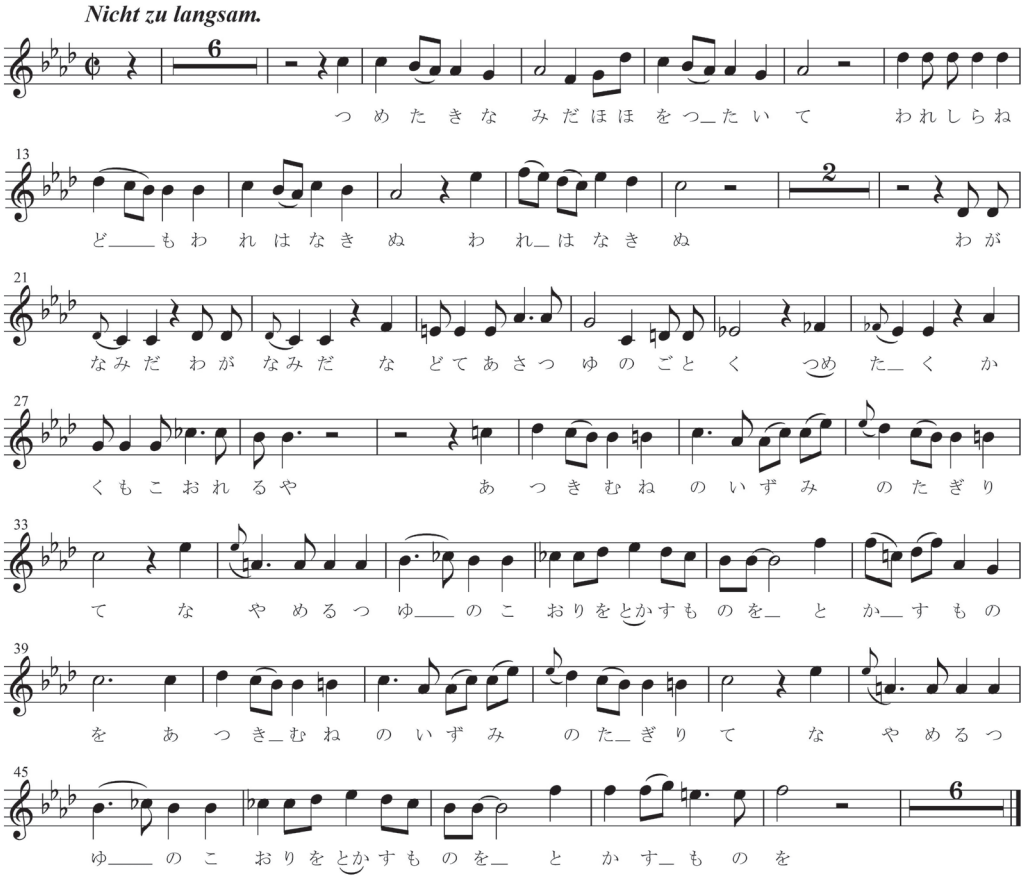
1. さらばよ君よ


Mäßig.
た だひとり ゆ__ くふ ゆのたび じ さつきのは な__ もお
14
と めのえみも や さしきは は__ もあ と_にのこ し こ いをかた
21
り__ しい え__ もあ と に かぜすさむ のべのゆ きをふみ__
29
つ おじかのあ しあとた どりすす む ゆめじのき
41
み__ のさ め ぬひ_ ま_ に さらばとし る__ すき み がか_ どべ
47
に と こしえに ゆ__ くさ ら_ばきみ よ さらばよき み__ よさ
54
らばきみよ とこしえに ゆ__ くさ らばよきみ さ
62
un poco rit.
らばよきみ__ よさ らばよきみ さらばよきみ__

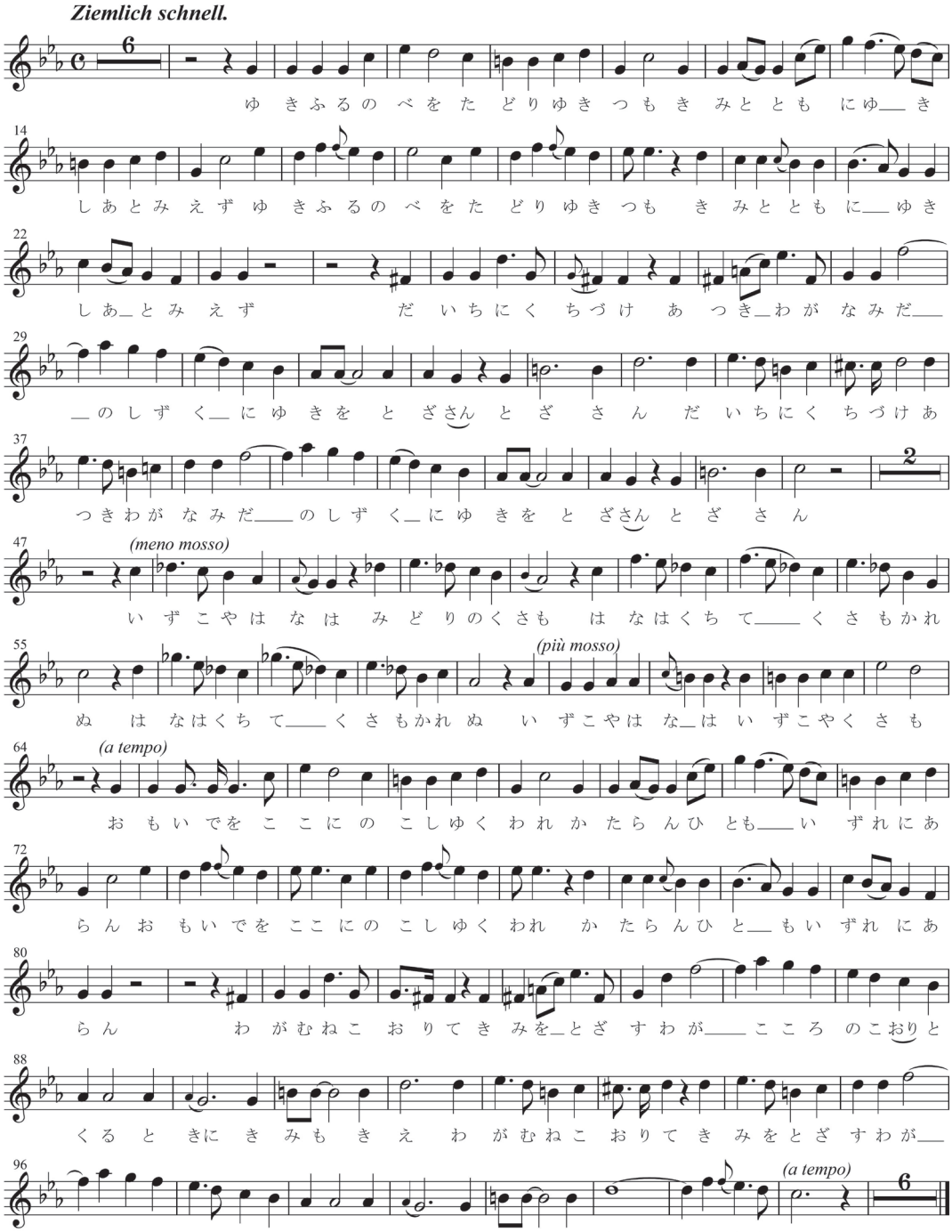
2. 風信旗


Ziemlich geschwind.
4
か ぜ に な び く か ざ み の は た き み が い え に た か く
10
わ が こ こ ろ の な や みを あ ざ わ ら う が ご と く と く う つ る き み
16
が こ こ ろ か ぜ に な び く はた の ご と き を わ れ は し ら
21
ず た だ あ こ がれ しよ ふ き す さ む わ が こ こ ろ の か ぜ よ お
28
と な く と い た も う な よ き み よ と む ひ と に と つ ぐ き み を なげ く
34
ふ き す さ む わ が こ こ ろ の か ぜ よ お と な く と い た も う な よ
41
き み よ と い た も う な よ き み よ と む ひ と に と つ ぐ き み を なげ く
5

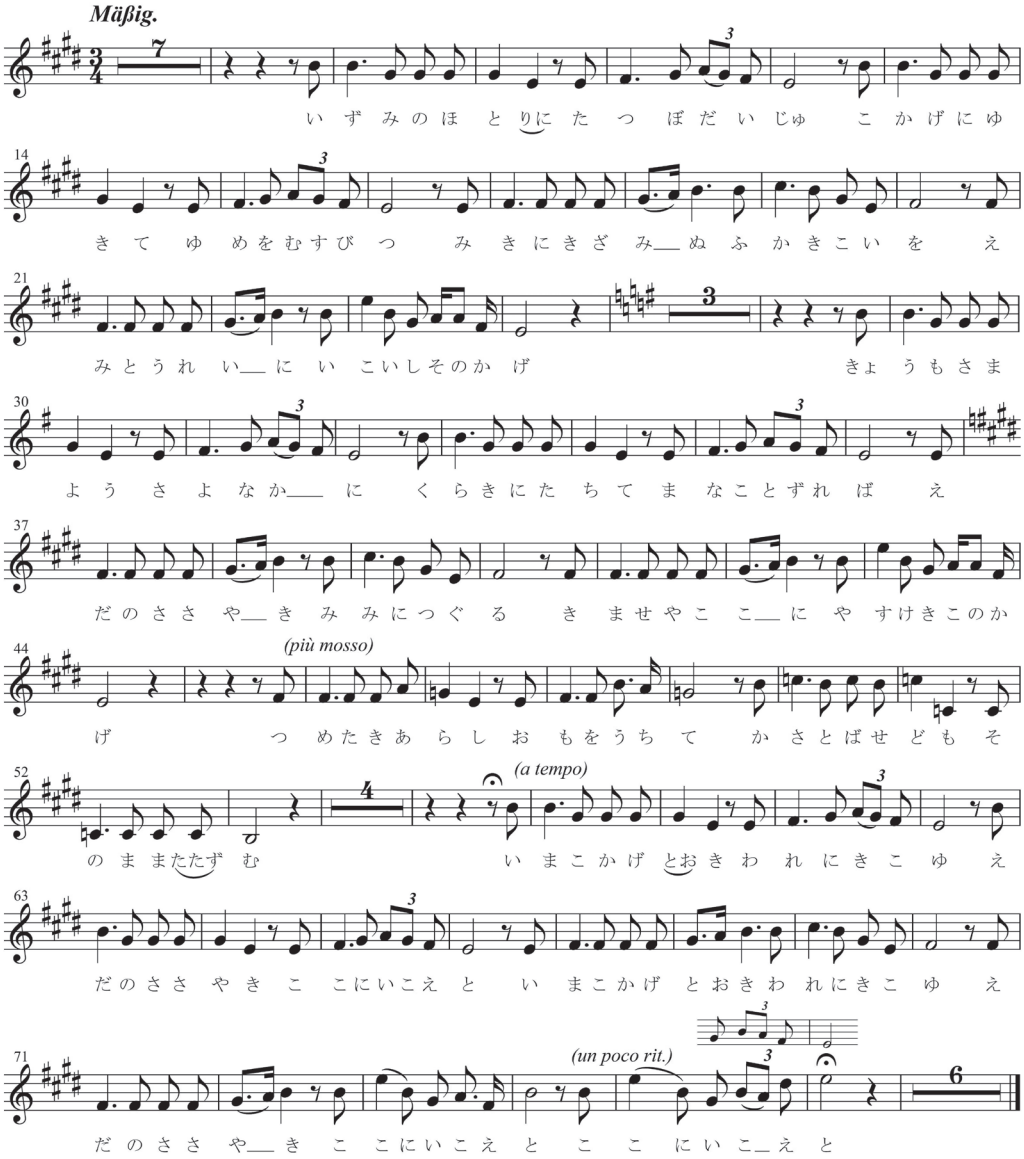
3. 凍りたる我が涙


Nicht zu langsam.
つ め た き な みだほほ をつ_た い て われしらね
ど___も わ れ は な き ぬ わ れ_は な き ぬ わ が
なみだ わが なみだ な どてあさつ ゆ の ごと く つめ た_く か
くもこおれるや あ つ き む ね の い ず み の た ぎ り
て な や め る つ ゆ___の こ おりをとかすも の を_ と か_す も の
を あ つ き_む ね の い ず み の た_ぎ り て な や め る つ
ゆ___の こ おりをとかすも の を_ と か す_も の を

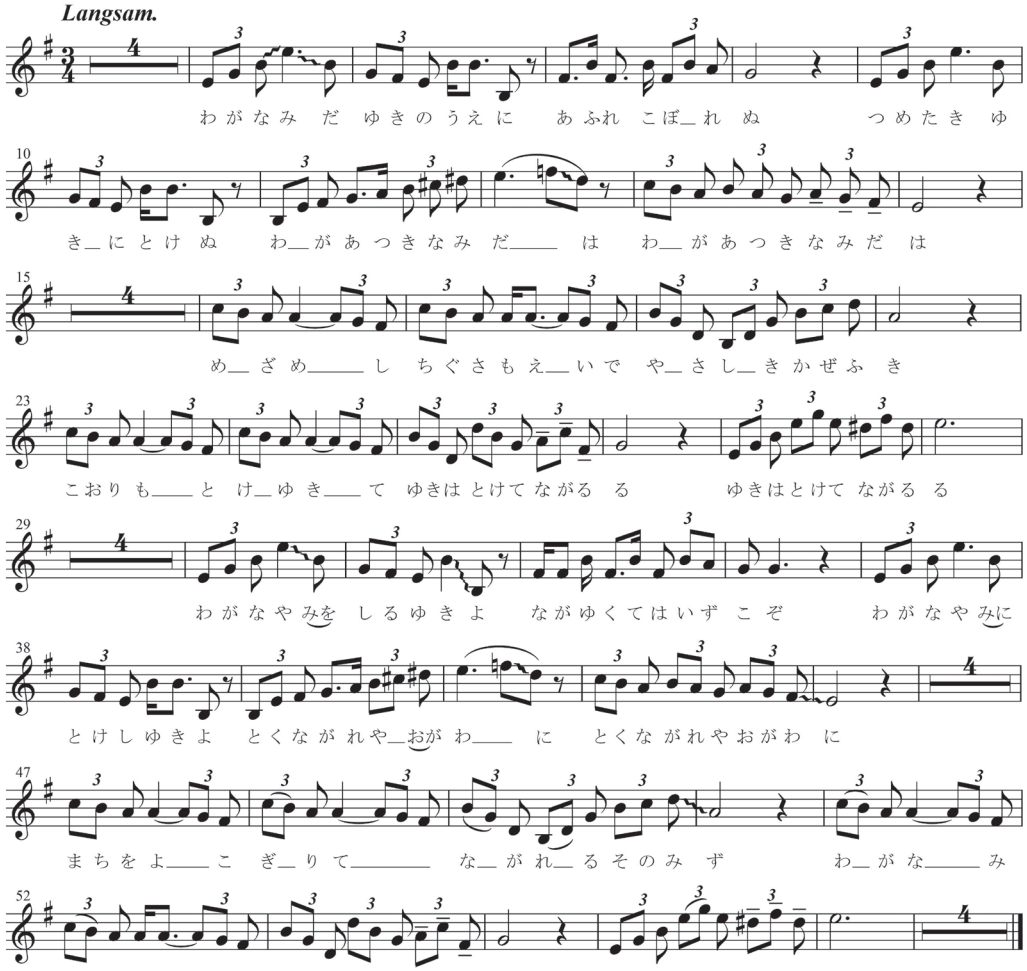
4. 氷結


Ziemlich schnell.
6
ゆ きふるの べを た どりゆき つも き みと とも にゆ___ き
14
しあとみ えず ゆ きふるの べを た どりゆき つも き みと とも に___ゆき
22
しあ_と み え ず だ いちにく ちづけ あ つき_わが なみだ___
29
___のしず く___にゆ きを と ざさん と ざ さ ん だ いちにく ちづけあ
37
つきわが なみだ___のしず く_にゆ きを と ざさん と ざ さ ん
2
47
(meno mosso)
い ずこやは なは みどりのくさも は なはくち て___ く さ もかれ
55
(più mosso)
ぬ は なはくち て___ く さ もかれ ぬ い ずこやは な_は い ずこやく さ も
64
(a tempo)
お も い でを こ こにの こしゆく われ か たら んひ とも___い ずれにあ
72
ら ん お も い でを こ こにの こ し ゆ く われ か た ら ん ひ と___も い ず れ に あ
80
ら ん わ がむねこ お り て き みを_とざ す わ が___こ こ ろ のこおりと
88
くる と きに き みも き え わ がむねこ おりて き みをとざ すわが___
96
(a tempo)
6
___こ こ ろ のこおりと くる と きに き みも き え んきえなん

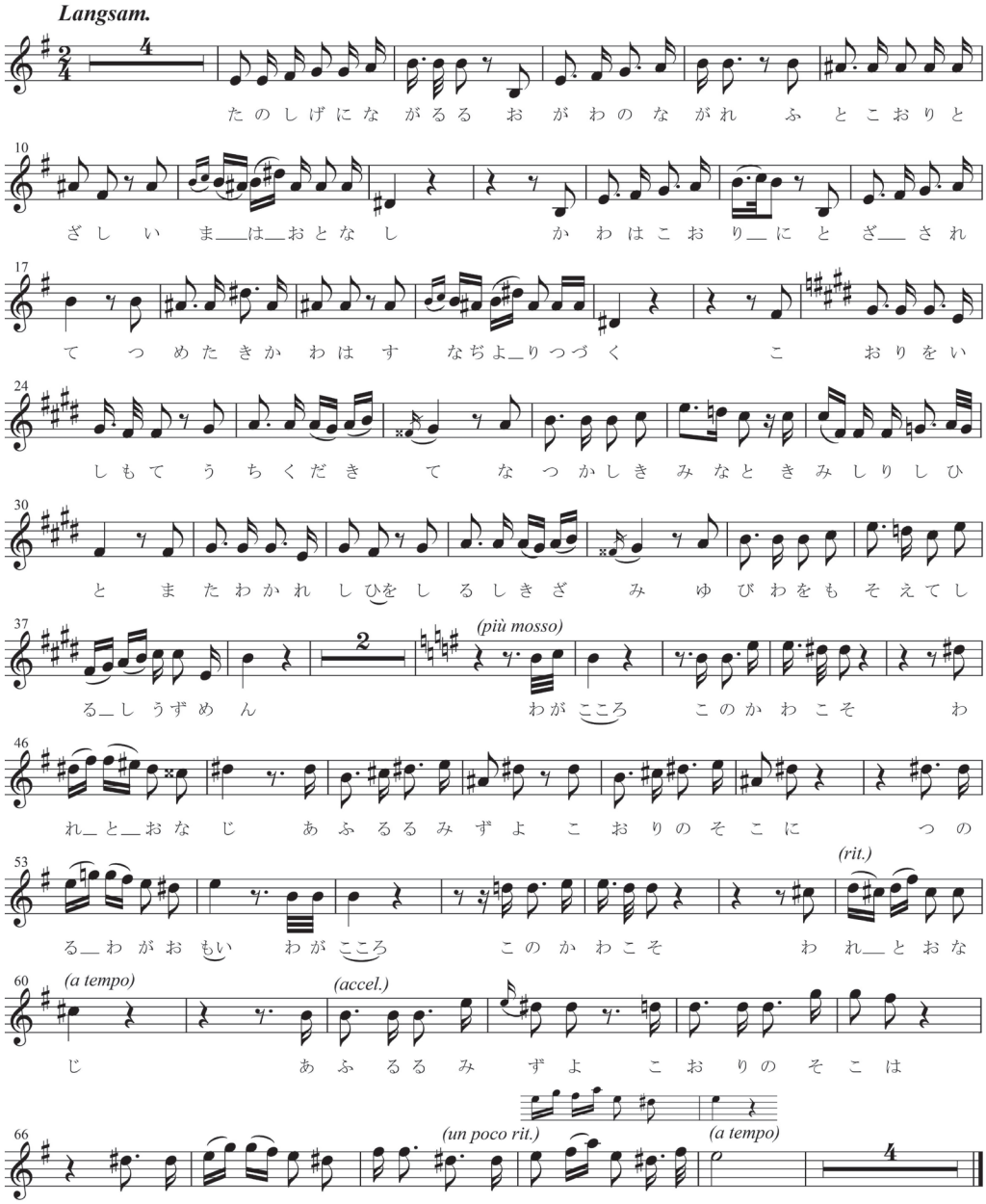
5. 菩提樹


Mäßig.
いずみのほとりにたつぼだいじゅこかげにゆ
きてゆめをむすびつみきにきざみ__ぬふかきこいをえ
みとうれい__にいこいしそのかげきょうもさま
ようさよなか__にくらきにたちてまなことずればえ
だのささや__きみみにつぐるきませやここ__にやすけきこのか
(più mosso)
げつめたきあらしおもをうちてかさとばせどもそ
(a tempo)
のままたたずむいまこかげとおきわれにきこゆえ
だのささやきここにいこえといまこかげとおきわれにきこゆえ
(un poco rit.)
だのささや__きここにいこえとここにいこ__えと

6. 満つる水


Langsam.
わがなみ だ ゆきのうえに あふれ こぼれ ぬ つめたき ゆ
き にとけ ぬ わがあつきなみだ は わがあつきなみだ は
め ざめ し ちぐさもえいで や さしきかぜふ き
こおりも と け ゆ き て ゆきはとけてながる る ゆきはとけてながる る
わがなやみを しるゆきよ ながゆくてはいず こぞ わがなやみに
とけしゆきよ とくながれやおがわ に とくながれやおがわ に
まちをよ こ ぎ り て な が れ る そ の み ず わ が な み
だ の そ の み ず いとしきみがかどべ を みよぎりてながる る

7. 川の上にて


Langsam.
たのしげにながるるおがわのながれふとこおりと
ざしいま__は__おとなし かわはこおり__にとざ__されて つめたきかわはすなぢよ__りつづくこおりをいしもてうちくだきてなつかしきみなときみしりしひとまたわかれしひをしるしきざみゆびわをもそえてしる__しうずめん
(più mosso)
わがこころこのかわこそわれ__とおなじあふるるみずよこおりのそこにつの
(rit.)
る__わがおもい わがこころこのかわこそわれ__とおな
(a tempo)
じあふるるみずよこおりのそこは
(accel.)
つのる__わ__がおもいつのるわ__がおもい
(un poco rit.)
(a tempo)